

敬僧都のひとりごとにより長明の方丈記と對比し、上人の出現を要求した時代の姿を見てゐる。此處で方丈記とひとりごとの時代を機械的に對比する事は避けねばならぬし、又鎌倉初期の宗教改革が此時に第二の改革を必要とした事情に就いて興味ある問題が含まれてゐるが然しそれは此論文の當面する問題ではない。次に上人の各方面に於ける教化の事蹟を特に公卿日記により皇室との問題を顯揚された事を多とする。尚上人の戒律觀、從つて其

無欲に就いて注意すべき記事があり其點明惠上人（上人も亦編者の崇敬措かざる方である）とのつながりを見てゐる。が、最後に蓮如との比較は感慨深きものがある。山科に本願寺王國を建設し其追從者の門に一向一揆を景發するに至つた蓮如と、一油煙の寄進をすら佛の意志により受くる事を頼み又其聽法者の間に自殺者の輩出した眞盛と、兩者の對比は宗教の社會性を考ふる上に根本問題を含む。宗教的世界の實現意念は何等かの形で現世界の秩序との摩擦を伴はずにはゐられない。それが武器を執つて克服する態度に出るか或は自殺の如きの形で自ら

現世的秩序より退くか各人の氣稟にもよるであらうが、尙戒律を守り行ひ澄ます人に聖なるものを感じる事を云ひ度いのである。（此事は榮西と道元とに就ても考へられうるであらう。）

尙本書編纂中編者は御次男と令弟を一月の中に亡はれ、本書が兩人の供養ともなる事を追記される。私は當時種々お話を承つた。今感慨を新にして此一書を人々に奨める。上人の遺風のより多く顯揚さるゝ事は即ち國民の精神的生活を豊にする事であり、同時に編者の所願であるからである。（定價三、五〇、三秀舎發賣）〔藤〕

### ●手島堵庵全集

手島堵庵の著書はその生前より歿後に及んで博く世に流布し且つそのことが比較的新しい時代のことに屬するので今日之を坊間に求めること必ずしもさまで困難ではなく、またその主要なるものは明治以後幾度も活字に翻刻されて何處に於いても容易に見ることが出来るが、中に當時多く施本として彼が道話の聽衆に頒たれた一枚刷や小冊子様のものは、それが當時心學に於いて多く用ひ

られた布教の手段として普通の著書よりも或は寧ろ一層注意すべきものであるにかゝはらず、そのものゝ性質上散逸し易く研究者の手に容易に入り難いものも少くない。本全集は昨秋東京に於いて行はれた心學開教百五十年記念大會を期として堵庵に下された贈位の恩命を記念せんが爲に後裔上河氏の意志により、堵庵の創立になりその道統を今日に傳へてゐる京都明倫舎の手によつて編纂されたもので、公刊の著書全部を網羅し之をその刊行の年次に従つて配列すると共に新に從來寫本として傳はつてゐた口述筆記數編を加へ別に堵庵の詩文、書柬、その他雜編をも輯めて一卷としたものである。既刊の著書はいづれもその初刊本に基いてテキストが整へられ、再刻以後に於ける相違も一々本文若くは卷頭の解説の中に於いて注記されてゐる。それらの内容については今一々盡すことをえない。新に本全集によつて始めて公にされるものゝみに就いていへば、「善導須知」「手島先生口授話」「論語講義」「堵庵先生講義(經語解)」「東郭先生遺文」の五編、中、始めの二つは始めて心學に入門し進んでその研究

をなさんとするものゝ爲に口授したところ、心學の所謂我なしの境地、我と萬物との和合の道理を極めて直截に論證してゐる。徒來の研究には寧ろ看却され勝であるが心學の眞の理解には無視することを得ない一面である。次の二つはその本文の中に「此方の學問は論語を説いても、つれづれを説いても、何を説かうが外の事は申さぬ只本心を御知りなされと申す事じや。又論語で有らうが大學で有らうが、本心を知て其通に行ふより外はござらぬ。」とあるによつて容易にその内容を伺ひうる。最後に「東郭先生遺文」は堵庵の詩文、雜編、書柬、社約等を輯めて今回始めて編まれたるもの、蓋し本全集中最見るべきものであらう。就中書柬はその數必ずしも多くはないが、地方に於ける心學社友との關係や既知未知の門弟に對する情誼なども窺はれ、堵庵の人物を知る上に最もよい資料である。社約は心學發舎社中の綱紀の維持改善の爲に定められた所のもの、既刊の「會友大旨」などと合はせて、彼が講師の人選や門弟の教導に如何に意を用ひたか、發舎の組織全教團の統制に如何に努めたかを見るべ

く、學祖梅岩の教説は實にかくの如くにして始めてよく全國に徧く、深く庶民の間に行はれることになつたのである。我々はそこに自己の固有の本性を知り私心私欲を去つてその本性を失ふことなからしめるといふそれ自らは永世不變なる道德が具體的には時代と社會とによつて如何なる形態と如何なる色彩とを與へられるものであるかを最もよく認めうるであらう。猶別に附録として「手

島塔庵先生事蹟」「年譜」等を添へてゐる。惟ふに心學の教が近世に於ける庶民の道義の維持發揚に貢獻する所多かつたことは早く故藤岡東圃によつて注意せられ爾來近世の思想史や教育史の攷究を事とする人々のこれが研究に手を染めるものも少なくないがそれらの研究はいづれもかくの如き新しい資料を俟つて一層精緻を期しうべきと同時にまた一の新しい生面をも開くべきであらう。(菊判

本 文六三五頁、京都市新町通二條上明倫會發行、非賣品)  
〔柴田〕

### ●新刊 Cambridge Ancient History

選り喪つたBuryの代さいCharlesworthを編者に加へた

紹介

Cambridge Ancient Historyは昨年九月第八冊を、同十月  
圖録第三冊(Prepared by Selman)を相ついで出した。前者は「紀元前一一八一—一三三年の羅馬及び地中海」と題し第二次ポエニ戰役の勃發よりヘルガムムの羅馬領となる迄を含み、編者Charlesworthもカルタゴ滅亡後論を出して居る。其他卷頭のGloverのPolybius、Hallwardのカルタゴ、Holleauxのイェドニア、Beneckeの希臘風文化諸國、があり、尙、Beyan、Rosfortzef、Ashmole等が各得意の方面を分擔して居る。後者は第七冊、第八冊に對するもので、貨幣、窯器、金屬製品、彫塑が主で各説明附なるが概して複製の多いのは遺憾の感がある。今少し新材料が得られないかと思ふ。併し古代史に關する著書が増し、この叢書の完成に次第に近づきつゝあるは慶すべきである。以上最近着本した儘、速報的に記す。(昭六一三—一九)

●カイロ所在、獨逸埃及古代研究所報告の發刊

Mitteilungen des deutschen Instituts für Ägyptische

Altertumskunde in Kairo.

第十六卷 第二號 三三三